Journal of The Human Development Research, Minamikyushu University 2024, Vol. 14 ,1-6

論　文

障害児の母親への連絡帳を介した支援についての一考察

本田　和也

A Study on Support for Mothers of Child with Dis A bilities through Cont A ct Books

Kazuya HONDA

キーワード：聴覚障害、乳幼児教育相談、連絡帳、視線共有、情動調律

概要：本研究では、母親支援の一つである連絡帳のやりとりでの事例研究を通して、肯定的な対人感情と直視量の増加との関係を検討した。その結果、母親の母親自身へのふり返りが、子どもへの肯定的な対人感情を促し、視線の共有へとつながることが示唆された。振り返りを促すことで、母親が「目を合わせるコツ」というものの存在を理解し、習得することで視線共有が成立しやすくなったのではないだろうか。母子間で、相互に情動調律がなされることで、相手への肯定的な対人感情が生まれ、結果的として母子間の視線共有量の増加になったのではないかと推測された。

目的

近年、医学の進歩により、ほとんどの新生児が生後１週間以内で、「新生児聴覚スクリーニング」を受けるようになった。そのことにより、生後１週間以内に「おたくのお子さんは聴覚障害の疑いがあります」と告げられることとなった。赤ちゃんが生まれてほっとしたものもつかの間、心の準備も全くない母親に対してこの言葉が突然告げられるショックは大きい。「この子はかわいい。子育ては楽しい。」と思う間もなくの聴覚障害の告知である。そういう時代を歩み始めた今、教育機関の果たす役割は大きい。

「新生児聴覚スクリーニング」で「リファー」となった赤ちゃんは、多くの場合、早くても生後２ヶ月頃には教育機関等を紹介され、４ヶ月程度で補聴器を装用し、併せて超早期教育を受けることとなる。

乳幼児段階では、教育における支援の対象は母親となることが多い。聴覚障害の子どもを肯定的に受け入れ、適切にかかわれるように、「子どもの障害理解」、「子どもへの補聴器装用への促し」、「聴覚口話法での指導法の体得」、「身振り・手話の使用の理解」などを、指導者とともに学んでいく。

多くの特別支援学校（聴覚障害）乳幼児教育相談の場合、それらは、親子遊びの中で子どもと遊びながら体得できるように母親支援を行っていく。遊びはいわば「やりとり」の場であり、コミュニケーションの最も基盤となるものである。

本事例は、生後３ヶ月の時に病院から紹介され、Ｚ特別支援学校（聴覚障害）幼稚部乳幼児教育相談に通っているＡ児の母親支援についての事例である。母親支援の中でも、特に母子の視線共有へ課題意識を持たせ、具体的且つ適切なかかわりを促し、母子の視線共有の楽しさを感じるまでの母親支援の過程の報告を行う。

本事例では、教師と母親の間で交わされている連絡帳を中心に母親の言動や行動の変化、心情の変化等をまとめていく。連絡帳でのやりとりの中には、集団保育の中では伝えてこない母親の素直な気持ちが書かれることがある。また、教師も、連絡帳（文章）を通してでしか伝えられない内容が含まれることがある。

飯塚（2005）は、視線の対人感情包括的「接近－回避モデル」を提案した。その中で、肯定的な対人感情が接近力（親和欲求やフィードバック欲求など）を高め、直視量を増加させると推測している。

このモデルが、聴覚障害幼児と母親との関係にも同様のことがいえるとするならば、視線の共有の増加を図るための地盤となる肯定的な対人感情は、具体的にはどのようなレベルで母子のかかわりの中に出現してくるのであろうか。特に母親のどのような感情が有効的な視線の共有へとつながっているのであろうか。

そこで、本研究では、母親支援の一つである連絡帳のやりとりでの事例研究を通して、肯定的な

対人感情と直視量の増加との関係を検討する。

母親の主訴

来校当時の母親は、自分自身への課題をあまり感じてはいなかった。母親は看護師（当時は育児休暇中）をしているため、比較的冷静にA児の聴覚障害の告知を受けとめようとしている感じであった。「この子はいつ話せるようになるか」、「人工内耳は効果があるのか」といった、A児の障害に関する質問がみられた。

A児の実態

20XX年12月、Y市内の産婦人科で、41週1日で出産（3290ｇ）した。出産後、自動聴性脳幹反応（AABR）で両側難聴の指摘を受け、X大学病院を紹介され受診した。２度の聴性脳幹反応（ABR）で重度難聴との診断を受け、障害者手帳１種２級を取得した。

20XX＋１年３月、生後３ヵ月でZ聾学校幼稚部乳幼児教育相談に来校した。それ以後、週１回の集団保育に参加している。

家族構成

父、母、姉（３歳）、A児の４人暮らしである。母親は１年間の育児休暇中である。A児が１歳なった段階で、職場復帰を考えている。近所に母方の実家があり、育児への援助がもらえる環境である。

母親への支援方針

生後１週間以内に、「難聴の疑い」を指摘された母親に対し、親子遊びを通して、「我が子がかわいい」と感じる場を設定していく。具体的には、親子遊びの中に、適宜、教師が仲介役として介入し、「どのようにかかわったらA児と視線共有が図れるのか」の具体的なかかわり方を母親に提示しつつ、習得させる。

支援経過

１．第１期（20XX＋１年４月～20XX＋１年７月）

1)「音への反応がありません。」

４月中旬。週１回の保育に参加し始める。A児は、母親に抱っこされて登校。母親は、小さめな低い声で「おはようございます」と言ってドアを開けた。A児は、ニコニコした表情で入ってくる。教師が「おはよう」と言葉を掛けるが、全く視線が合わないのが気になる。A児は天井の模様や蛍光灯をずっと交互に眺めている。人の存在をあまり意識していない感じを受ける。母親がA児のオムツを換える時、ほとんど無言のままで作業を終える。その他の場面でも、ほとんど母親のA児への言葉掛けが少ないのが気になる。

４月下旬。補聴器を装用して初めての聴力測定を行う。装用２週間だがあまり装用効果は見られない。装用して間もないことや、まだ月齢も小さいことから、装用効果が出てくるのは時間がかかることを母親に伝える。装用効果が出るためにも、A児に常に楽しく明るい声で話し掛けるように説明する。母親からは、「がんばります」との返事。しかし、元々、声量が小さく、おしゃべりが得意ではないと母親自身が言うように、この母親のかかわりでA児の聴覚活用が促されるのか、少々心配になる。それに反して、母親は、A児の聴覚活用を図ることへ意識は高く、聴覚活用ができることが第一という印象をもつ。それ以降の連絡帳には、A児の音への反応への内容が増えてくる。

【母親の連絡帳から】

５月14日

「今日も音への反応はありません。」

５月15日

「Aを呼ぶ時、声の大きさなどに注意して何度も試したのですが、全く反応ありません。」

５月18日

「今日の保育でも、太鼓の音やいろいろな音に、反応がある！と感じませんでした。」

教師からは、「聴覚活用も大事だが、今は、いろいろなコミュニケーション手段を通してA児とかかわるようにしましょう。」といった内容のコメントを書く。また、教師は、母親がA児の音への気付きも感じ始めていたので、そのことも伝え、成長の喜びを共有する内容を書く。

【連絡帳への教師のコメントから】

「ことば」というものは、耳を育てるとともに、表情、身振り、手話…などからも、たっぷりと入るものです。まずは「100％分かる手段」で話し掛けていきましょう。お母さんも、「しっかり伝わった！」という実感を味わってくださいね。」

「保育の中で、『あれ？今、太鼓の音に気付いたのでは？』思う時もありました。きっとこういう姿が増えてくると思いますよ。聴力的にも、音声はしっかりと届いているはずです。信じていきましょうね。」

2)「音に気付いた気がします。」

６月頃から、保育中に、少しずつ音への反応が見られるようになってきた。そのことを母親にも伝え、どのような声や音に反応するのか、家庭でも様子を見るように伝えた。

登校しての入室時、A児は、必ず天井や蛍光灯を眺めて、教師との視線共有が成立しにくい状態が続いており、そのことがずっと気になる。A児と母親の親子遊びの様子を見ていると、全く視線共有がなされずに、まるでA児が一人遊びをして、その後を母親が追いかけているかのような印象を受ける。母親には､「目と目を合わせて遊ぶと、A君もきっと楽しいですよ。」という内容を話す。

【母親の連絡帳から】

６月10日

「今日、保育で頂いたビー玉とおはじきを入れたペットボトルのおもちゃをガチャガチャすると、3回音に反応したように感じました。」

６月18日

「今日、私の呼びかけにキョロキョロ反応したように感じました。」

６月19日

「今日は、おもちゃを合わせるガチャガチャの音に、パチパチと目を閉じていました（何回も）。ガチャガチャの音が聞こえたからだと思いました。」

【連絡帳への教師のコメントから】

「今は、『音』もですが、保育中にも伝えているように、『目と目を合わせて』かかわることを、意識してみてくださいね。目と目が合うと、その人の口から発せられる音声へも必ず興味をもつようになりますよ。」

「今回の保育は、おばあちゃんも参加してくれましたよね。おばあちゃんが一生懸命に目と目を合わせようとしているのがうれしいでした。A君は、本当にいろんな方に愛されて育てられているのでしょうね。」

２．第２期（20XX＋１年９月～20XX＋１年10月初旬）

1)「目が合わないですね…」

９月中旬。A児と教師でボールを転がす遊びをする。途中、お母さんの方にも転がし、「今度はお母さんとA君とね。」と、親子でボールを転がすように促す。しかし、ほとんどA児は母親を見ようとはしない。教師が介入し、「ほら、お母さんこうすれば目が合いやすいよ。」と、ボールを転がす前に教師の顔の近くにボールを持ってきて、目が合ってから転がすようにする。同じ行動をするように母親に伝えるが、なかなか視線共有ができない。「目が合わないですね…」と、母親がつぶやく。「A君がお母さんと目が合いやすい、好きな遊びが見つかるといいですね。」と伝える。

【母親の連絡帳から】

9月15日

「Aとの遊びが続かないことについて、今週、これから好きなボール遊びでがんばります。」

「『心の理論』について、先生からお話しを聞き、子どもと目が合うことの大切さを知り、その重み（重要性）を感じました。Aと５年、10年後を真剣に考えさせられました。『１日30分』親子遊びに力を入れます！」

「ダラダラと遊ぶことが多く、30分集中して遊んでいないことが分かりました。目と目が合う遊びが見つけられるといいですけど。」

【連絡帳への教師のコメントから】

「どうでしたか、（目と目を合わせることを）意識してみて。A君は、今、けっこう人とのかかわりの大切な時期になってきています。目と目が合い、楽しく遊んだという実感をお互いに味わっていきましょうね。」

「この期間、『遊び』を意識されたようですね。お母さんが、この大切さを感じて下さっていることがうれしいです。A君、だんだんと成長してきています。ただ、私は今、A君が『一人で遊んでしまう』ことが気になっています。『人とかかわる力』は、『人と遊ぶ』につながっています。今、この時期は、A君にとって大切になってきていると感じています。その子その子なりの、遊びのコツがあります。お母さんが、そのコツを体得して下さったらと思います。」

2)「実際に合っていないのを知ると､つらいです。」

９月下旬。グループ保育の中で、全員の親子遊びの様子をビデオに撮り、反省会でビデオ視聴をし、どうかかわったらいいのか話し合った。A児の母親は、「実際に目と目が合っていないのを知ると、つらいですけど、これからがんばります。」というふり返りをした。客観的に母親自身のかかわりを見ることで、何らかの大きな心への刺激があったようだ。この日を機に、母親のかかわりが

次第に変わっていくのを感じた。

【母親の連絡帳から】

9月24日

「ブロックで遊ぼうと思い、ブロックを出したのですが、Aは手に持ち、ブロックを見たり、軽く投げたりするだけ。私も目が合うように、ガチガチしてみたり、自分の顔の近くで動かしたりするのですが、全く目が合わずに終わりました。」

9月28日

「今日、ビデオで親子遊びの状況を撮影し、それに対し、先生から指摘をもらう方法は、自分のかかわり方を見直すこともでき、他のお母さんの子どもへの接し方など、学べることも多くありそうで、今後も行ってほしいでした。Aは、一人遊びに走ることが多く、家でも私が折れてしまいそうです。まだまだコツが分かりません。」

「最近、動きも活発になり、危ないことなどが多く、ダメ！危ない！痛いよ！など、健聴児には声の強弱や顔の怖さなどで伝えられますが、Aは難しく感じます。表情プラス手話も交えて行っていますが、Aは始終ヘラヘラ笑っています…。」

9月29日

「遊びの中で、太ももにAを置き、ゆらゆら揺すると目は合いました。動きを止めた時に、「まだやって！」って感じでしたが、2回目以降は、周りに視線がいってしまいました。

9月30日

「今日は、ボール遊びがいつもより長く続けて遊べました。」

10月6日

「毎日、ボール遊びをしているので、ボール投げが上手ですよ。」

【母親の連絡帳から】

10月16日

「今日は、『いないいないばあ』の時に、動きを止めると、催促するかのように『あーあー』と声を出していました。きっと催促していると思ったので、『もう1回する？』とAに聞き、再び遊びました。」

10月17日

「公園の小さい子ども用のブランコに乗せると、首を横にゆっくり傾け、『楽しいなあ』と言っている様子でした。Aの気持ちをたくさん代弁してあげました。」

10月18日

「自分で『いないいないばあ』をしているような行動がありました。手で顔を隠すのではなく、顔を机に隠す形で、自分で屈伸をしてやっていました。」

【連絡帳への教師のコメントから】

「学校でも、イスを使った『いないいないばあ』をたくさん見せてくれましたね。いつの間にか、こんな遊びを楽しめるようになったとは…うれしくなりました。お母さんも、こうしてA君の笑顔が返ってくると、うれしいですよね。」

「本当に、目と目が合いやすくなってきていますよね。私も、本当に今回は『目と目で会話』ができました。うれしい成長が見られた1週間でしたね。」

「今回のA君は、動きに落ち着きが見られ始めた気がします。ゆっくりになったというか…。一つ一つの活動の終わりに、お母さんの顔を確認する場面が増えましたね。見ていて微笑ましく思いました。『A君、成長したんだなあ』と思います。」

3．第3期（平成22年10月中旬～平成22年12月）

1）「そろそろ仕事復帰しますが心配で…」

母親の復職が近づき、保育園に預けることも決まった。A児と一緒に一日を過ごす日に限りがあると感じ始めたのか、母親の口から出る言葉にも、不安を感じているのが分かる。「そろそろ仕事復帰しますが、このままでいいのか心配で。今からできることはありますか？」との相談を受ける。グループの他の友達と比べて、なかなか音への反応がないこと、なかなか目が合わないことを伝えてくる。改めて、時間をしっかり確保して、毎日たっぷりと遊ぶようにと伝える。遊びの大切さを少しずつ感じてきているのが分かる。

2）「子どもとの時間が大切なことに気付きました。」

母親がA児に声を掛ける時に、姿勢を低くして目線を合わせて声を掛けている場面が増えてきている。また、その時の声が大きくなってきているのを感じる。

おやつの時に、初めて「いただきます」の身振りをする。母親に、「すごいね」と伝えると「最近するようになりました。うれしいです」とうれしそうに答えた。

帰り際、教師がA児に「バイバイ、またね。」と言うと、教師に向かって初めて手を左右に振る。「これも保育園に行くようになってするようになったんですよ。」と母親が笑顔で話してくれる。

【母親の連絡帳から】

11月9日

「今日の保育で、いろいろと、ふり返ることのできる日でした。」

「私は、初めの頃、『まずはお母さんが楽しく遊びましょう』と言われる中、目と目が合いにくく、コツもつかめず、どうしていいのか分からない時期がありました。楽しくない、逃げたい、自分との葛藤みたいな…。でも、保育の時間に先生方の熱心なアドバイスを受けたり、他のお母さんや子どものかかわり方や家での方法を聞いたり見たりする中で、少しずつ子どもへの接し方のコツ、みたいなものが分かるようになりました。」

11月10日

「２、３日前くらいから、お風呂に入っている時や、向き合って遊んでいる時に、Ａとお話すると、じーっと私の口元を見ていることがあり、それに気付きました。そんな時は、ゆっくり分かりやすいように話し掛けます。」

11月30日

「前回の先生からのコメントで、『Ａ君は、お母さんが話しかけている時に見ていますか？』の質問には、正直、見ている！とは言い切れません。遊んでいる時に、Ａが私を見るようにはなりましたが…。難しいですね。しかし、働きながら遊ぶ時間も限られてきますが､がんばっていきます！」

12月11日

「最近、ご飯の時の『いただきます』の身振りが上手になってきていますよー。食事中、自分が欲しいものでない時、『イヤイヤ！』と首を振るようになりました。

12月13日

「仕事を始め、子どもとの時間がとても大切であることに気付きました。」

12月28日

「絵本は、毎日ではないのですが、読んで見せ、時間のある時は、何回も読んであげています。すごくうれしそうに絵本を見入ってくれます。止めると泣きます。」

12月29日

「お姉ちゃんと３人で、ボール遊びをしていたら、２ｍぐらい離れたＡに「ちょうだい（手話）」をすると、ボールを片手に持ち、ハイハイして私のところに来て、ボールを渡してくれました。すごーく大げさに褒めてあげ、何回か繰り返してみました。」

【連絡帳への教師のコメントから】

「だんだんと保育中でも、目と目が合うようになりましたね。うれしいことです。お母さんを見て、ニコッとする姿がとてもかわいいです。ご家庭で、お母さんなりに時間を決めてじっくりＡ君とかかわったんですね。だから、今の成長があるんですね。これからお仕事が始まりますね。子育ては『量より質』だと思います。これからも、いいかかわりを続けてくださいね。」

「働き始めると、遊びの大事さがひしひしと分かりますよね。難聴の子ならさらに。日々のことば掛けの積み重ねだと思うと、まず、時間を見つけるのに苦労して…。でも、ご自分が選んだ道、どうにかご両親で話し合い、かかわる時間を見つけていきましょう。」

考察

本研究では、母親支援の一つである連絡帳のやりとりでの事例研究を通して、肯定的な対人感情と直視量の増加との関係を検討した。

第１期では､母親の関心が「補聴器の装用」､「聴覚活用」にあることが伺えた。連絡帳にも、「どうしたら補聴器を取らなくなるのか」､「どうしたら音に反応するようになるのか」と言った質問が多かった。そのため、教師は、聴覚活用も大事だが、表情･身振り･手話など視覚言語を多用し､「Ａ児に100％分かる手段」でかかわることを提案した。この時期の教師の意図は、「母親がＡ児と通じ合う実感を得て、Ａ児がかわいいと思えるようになってほしい」であるといえよう。

「天井や蛍光灯ばかり見ている」のは、聴覚障害乳児に比較的多い行動であるが、その要因として、よく「人とのかかわりのおもしろさを実感できず、人への関心が減少し、寝ている状態からでもいつも見える天井や電気器具に興味がいく」ためだともいわれている。時々、聴覚障害乳幼児に対し、自閉スペクトラム症という誤診があるのは、そういうことの表れの一つともいえよう。

親子で遊んでいるかのように見えて、結局は一人遊びの世界に入ってしまっていることを、教師はどうにか母親に伝えようとした。しかし、なかなか親子での視線共有の経験が乏しい母親には、その意味が伝わらないでいた。教師とは視線共有が成立しているが、どうして母親とは成立しないのか、その違いに気付かせようと、教師が意図的に母親にかかわっている時期といえよう。

第２期に入り、最も親子のかかわりに変化をもたらしたのは、「親子遊びをビデオ録画し、ふり返る」活動であるといえる。ビデオを通した自分自身の子どもへのかかわりの振り返り（本田, 2023）は、母親自身の言動や行動を最も分かりやすい形でかかわりをフィードバックできる活動であるといえる。

母親の、「実際に目と目が合っていないのを知ると、つらいですけど、これからがんばります。」という言葉からも、落ち込みとともに、次の成長へのきっかけとなっていることが伺える。「Aは、一人遊びに走ることが多く、家でも私が折れてしまいそうです。まだまだコツが分かりません。」という言葉は、第１期には聞かれないものであった。「今は上手くかかわれない自分を味わいつつも、どうにかしたい。」という気持ちが表れている文章ではないだろうか。また、「コツが分からない。」という言葉からは、今の上手くいかないかかわりの原因はA児の障害にではなく、母親自身へのかかわりにもあると感じ始めていることが伺えた。それは、A児への肯定的な対人感情が芽生え始めているきっかけにもなっているかのようにも取ることができる。コミュニケーション障害の原因がA児ではなく、母親自身のかかわり方へ視点が移り始めている時期といえよう。

第３期は、母親の復職が迫り、実際に復帰をする時期と重なる。「そろそろ仕事復帰しますが、このままでいいのか心配で。」という言葉からも、復職に向けて母親の焦りのようなものを感じる。しかし、それを機に、母親が具体的に母親のかかわりが変わっていくのが伺えた。「私の声が大きくない！いつの間にか意識が薄くなっていることに気付きました。リアクション、声を普通以上に大きく（オーバーに！）していかないと…」といった、母親自身の言動や行動へのふり返りは、そのことがはっきりと表れている言葉であるといえる。「すごくうれしそうに」A児がしていると感じたり、「すごーく大げさに褒めて」あげたりといった心情面を書き始めたのはこの時期からであった。これはまさに、A児を肯定的に受け入れているからにほかならないといえよう。集団保育の中でも、母親とA児との間で視線共有が何度もなされるのが見られ始め、教師は、「だんだんと保育中でも、目と目が合うようになりましたね。うれしいことです。お母さんを見て、ニコッとする姿がとてもかわいいです。」というコメントを書いた。これは、視線共有がなされた事実とともに、A児自身も母親に対して関心を示すようになったことを伝えようとしていることが伺える。

母親の母親自身へのふり返りが、A児への肯定的な対人感情を促し、視線の共有へとつながったということを示している。母子の視線共有には、母親だけではなくA児自身の「母親への視線量の増加」が前提となるが、これは、母親の母親自身へのふり返りが、A児の母親への視線量の増加の要因となっているのではないだろうか。第２期で、「教師が介入し、『ほら、お母さんこうすれば目が合いやすいよ』と、ボールを転がす前に教師の顔の近くにボールを持ってきて、目が合ってから転がす」ことを行っているが、第３期には、どうしたらこうした視線共有ができきるのかを、母親自身が習得したからだと考えられる。

母親自身も語っているが、「目を合わせるコツ」というものの存在を理解し、習得することで視線共有が成立しやすくなる。その基盤となるものは、相手への肯定的な対人感情である。その肯定的な対人感情は、情動調律の成立とともに芽生えるものともいえる。母親とA児の間で、相互に情動調律がなされることで、相手への肯定的な対人感情が生まれ、結果的に視線共有量の増加になったのだと推測される。

謝辞

本研究に当たっては、A君及びそのお母様に協力をいただきました。心から感謝申し上げます。また、Z特別支援学校（聴覚障害）の校長先生をはじめ、諸先生方にも協力をいただきました。皆様の協力なしに本研究をすすめることはできませんでした。本当にありがとうございました。

引用文献

本田和也（2023）集団保育における自立活動の発想を踏まえた指導－保育者と発達障害幼児のやりとり分析を通して－．南九州大学人間発達研究．13，27 - 33.

飯塚雄一（2005）二者間における視線行動の表出に及ぼす対人感情の影響：視線の対人感情包括的「接近－回避モデル」の検討．広島大学教育学研究科学位論文.